

なか

広報

2006 No.18

- 発行日／平成18年7月11日発行
- 発行／那珂市
- 編集／市長公室企画課広報係
〒311-0192
茨城県那珂市福田1819-5
- ホームページURL(携帯可)／
<http://www.city.naka.ibaraki.jp>
- メールアドレス／
kikaku@city.naka.lg.jp

7 目次／Contents

8月1日から福祉循環バスが変わります	2
歴史民俗資料館だより 水鳥	8
議会 第2回定例会	10
市政だより(市章等が決定しました)	12
〃 (固定資産税の税制改正)	13
〃 (特別児童扶養手当)	14
環境ミニトピックス ほか	15
まちの話題	16
Information	18
市中央公民館から図書案内	20
生き活き人	22
さわやかさん、表紙の裏側 ほか	24



緑生い茂る校庭で茶摘みを楽しむ生徒たち(那珂三中お茶摘み大会)

水鳥

3

「講」と
その道具

講は古くから人々の間で行われてきた民間信仰です。同じ信仰を持つ者同士が組織し、講の開催日には当番宅や社寺等に集まり祈禱や念仏があげられました。

そもそも、平安時代に僧が集まり仏典を講読する集まりを講と言いましたが、江戸時代までの間に、様々な民間信仰が人々の間に波及するにつれ、個々の信仰集団を〇〇講と呼ぶようになりました。信仰の対象や形態は講によって様々で、社寺の氏子や檀家で組織し、主神や本尊等を信仰する大きな講もあれば、組内で伝承されてきた信仰を基に組織するもの、氏神を祀り家族で組織する講、ほかがあります。

当館では、主に組内で組織された百万遍講・十九夜講・庚申講で使われた道具類を数点収蔵しています。

ひやくまんべんこう
百万遍講

百万遍講は、彼岸の中日に日々の安泰と死後の成仏を願う組内で行われた講です。現在当館には、菅谷仲福田地区から寄贈された百万遍講の道具が展示してあります。その仲福田地区の百万遍講の様子が、平成5年に青少年育成那珂町民会議から発行された冊子『道しるべ』に記載されています。

それによると、毎年春と秋の彼岸の中日に、老人たちが持ち回りの当番の家に集まります。持ち寄った菓子や煮物をつまみながら世間話をした後、仏前に灯明と酒を供えて皆で長老を中心に車座になり、カンカンという鉦の音に合わせて「ナムマイダー・ナムマイ

現在、当館には約1000点近い資料が収蔵されています。数千年前の石器や土器等の考古資料から近世の文書、近代の民具というようにその種類は多岐にわたります。今回は、それらの中から民間信仰に関わる資料をご紹介します。

ダー」と唱えながら大数珠をまわしていきます。大数珠は小玉365個と大玉1個から成っていて、大玉が自分のところへ回つてくると額に押し当て、12回まわしたところで行事は終了します。

ところで、この大数珠ですが、小玉と大玉の数、そしてまわす回数にも意味があります。小玉の数は1年の年数を、大玉は太陽を表し、まわす回数は1年の月数になつています。この数珠そのものが太陽系を意味し、神仏の象徴とされました。

さて、行事がすむと当番宅は子供たち、組内の家々を廻るように依頼します。子供たちは、褒美の駄菓子をほお張りながら大数珠を抱え鉦を鳴らして各家を訪ね、それを迎える家では一家総出で



百万遍講道具一式(菅谷仲福田地区)

玄関に向き、立ったまま念仏を唱えて数珠をまわしました。

記録によると、この行事は明治44年から平成3年まで行われていました。その後も大数珠等の道具は大切に保管され、平成8年に当館へ寄贈されました。百万遍講は広く各地で行われていた講ですが、平成になつても続けられ、道具も残っているのは大変珍しいことです。桐材を荒く削つて作られた数珠は、長い年月人々の手に触れ丸みを帯び、銚色の光沢を放っています。

じゅうくやこつ
十九夜講

十九夜講はジュウクヤッコなどと呼ばれる、女人信仰の代表的なものの一つです。安産を祈願する講で、多くは毎月19日の夜に開催され、女性だけで持ち回りの当番宅へ手料理や茶菓子を持つて集まりました。

まず、掛軸(如意輪観音や子安観音など)を掛け、花や料理をお供えし、ロウソクを灯します。

「婦命頂礼、婦命頂礼…」講員が声を合せて一通り和讃を唱え、勤行は終わります。その後、女性たちは持ち寄った料理を食べながら、世間話に花を咲かせました。

「お産は棺桶に片足を突っ込んでするようなもの。」といわれた昔、死産や出産で命を落とす女性が多

かったため、このような講は各地に存在しました。講員たちは、自分やその近親者にやがて授かる命が無事にこの世に誕生し育っていくことを互いに祈り、講はいわば運命共同体のようなものでした。よそから嫁にきたものが講員として認められるのは、一つの通過儀礼的な意味合いもあつたようです。

また、十九夜講には、信仰のほか女性たちの憩いの場としての役割もありました。日頃家事に追われた主婦が家族の理解のもと、出かける数少ない機会の一つでもあつたのです。ここに集い色々な話を花を咲かせることが楽しみでもありました。

現在、当館には戸崎内郷地区の十九夜講の掛軸を展示しています。諸々の苦難を払うとされ、頭部に十一の面を有する「十一面観世音」と安産のご利益があるとされる「如意輪観音」が描かれた掛軸二本が一組になっています。

戸崎内郷地区の十九夜講は、昭和60年まで3・6・11月の19日に開催されていましたが、講員の高齢化のため解散しました。昭和の中・後半にかけて、多くの女人講は、女性の社会進出などの理由で、新たに講に加入する若い女性が減り、講員の高齢化が進み次々に解散してしまいました。

現在、市内で継続が確認されている十九夜講はほんの数件のみです。

庚申講

庚申講は、オコシンサマなどの呼称で親しまれた講で、年に6回ある庚申の晩に、体内で眠っていた三戸の虫が体から這い出し、天帝にその人物の悪事を告げ、その内容により寿命が決まるとの道教の伝説がもとになっています。

庚申の晩は、講員が当番の家に集まって掛軸を掛け、酒やご馳走を供えて酒盛りをしながら賑やかに夜を明かしました。昔は、人が眠ると三戸の虫が起き出すとされていたので徹夜したそうですが、行事は次第に簡略化され、いつしか掛軸とお供えの前で軽く一杯飲んで解散というようになり、今ではほとんど行われなくなりました。

さて、当館には寄贈された庚申講掛軸を6点収蔵していますが（現在は未展示）青面金剛が描かれたもの



如意輪観音（戸崎内郷地区）の掛軸

と、猿田彦が描かれたものと2種類に分類されます。青面金剛は、青

い恐ろしい顔が特徴で、邪鬼を踏みつけ、その脇には鶏が二羽と三匹の猿が描かれている構図が多く見られます。青面金剛は

疫病や災いを引き起こす神なのですが、あえて邪悪な神を祀ることで、災いを遠ざけたいという気持ちを表していると考えられます。鶏が描かれているのは、申の日の翌日が酉の日で、鶏は夜明けと講が明けたことを告げる神聖な動物であるため。猿は庚申の申＝猿であることから、三戸の虫

に見立て三匹描かれたといわれています。

一方の猿田彦は、庚申の申と猿田彦の猿を掛けたもので主に神道で信仰されました。赤い目と大きな鼻が特徴で、物事をよい方へ導く神とされ、この信仰は旅人を護るとされる道祖神信仰にもつながりました。

他にも、いくつもの講が昭和頃まで各地で行われていました。しかし、昭和頃頃から、生活スタイルや価値観の変化などからほとんどがその姿を消してしまいました。

物や情報が溢れ、便利に暮らせることも幸せなことですが、近所同士が同じ目的の元に集い語り合う素朴な場も、信仰心や人とのつながりが希薄な今、羨ましくも感じられます。

平成17年度寄贈・寄託資料

○寄贈品

- ・電熱器・スクラップ帳・写真他
(戦争関係資料として) 五台 個人
- ・粉挽き (戦争関係資料として) 戸 個人
- ・千人針 (戦争関係資料として) 芳野 個人
- ・養蚕関係資料 他 菅谷 個人
- ・子安講道具一式 芳野 松の口子安講
- ・庚申講道具一式 芳野 松並地区
- ・雛人形 瓜連 個人
- ・平板測量機・写真 木崎 個人

●寄託品

- ・古文書 芳野 個人
- ・雛人形 菅谷 個人

寄贈・寄託者のかたに厚くお礼申し上げます。今後も資料館の充実を図ってまいりますので、古い文書・道具・写真などお持ちのかたは、ぜひご連絡ください。
※諸事情によりお引き受けできない場合もございます。